

安田孝子編

異本唐物譜

古典文庫

平成五年七月二十日印刷発行

非売品

編 者 安 田 孝 子

發 行 者 吉 田 幸 子

印 刷 者 白 橋 印 刷 所

製 本 所 共 伸 所

發行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

電 話 (三九一〇) 二七一七
振替口座 東京九・一四五九七番

古 典 文

庫

安田孝子編

異本唐物語

古典文庫

じつとも歎な傷つける事あり世せれ
まことにほきれすとさう春の暮れ秋の
月もとどまつてたりやう月とくらむる
てにあれどもさうありまゆ人をうそしたれ
くわくわゆは先づそれ月のひくまく
すかへるはり、さりとちくらむるやう
えあがめうきみにとむつてみますと
まわんとうなりうちのねぐまに
てあわせ葉月をかざすかうとおひき
ぎへそよひとひそ月あらまぢう

けりとひのくわうまわせ

りあらきく月みかづき

かうは人まよへるの、

まつりてはかにかでぬのすみの程

されてもりてすみやうここの今

あまくがねくのとまゆる今

まむけ

ひ／元和十六年の秋の夜の月

て白羽としすみれの月の秋の
林の外の竹に葉を落す月の秋の

(一ウ)

をまの心事、ほんとうの心事、さういふ風氣
がよくあつたことはあるまい。しかし、たゞおぼ
かぬに思ひ出されても、余計はるかなま
で、ゆきゆきとひきかへて、心も身も、とてゆく
うても、あらゆるにほのけるには、ひと度、
うつむきにせよ、いつかとてゆくは、それとてゆく
わざと、そよと、わざと人のうづくめ、たぐい
い笑みとまつりたる、ときには、まことに、とてゆく
それが、かうすまことねうすまことねうすまことの
あがひ音、おひ三みどり音、おひくつ音、

本世人の爲めの世がわざと門の傳を
あてててはまつてとて物をもとめら
ふみうるわざとてはまつてはまつて
みをまつてはまつてとてはまつてはま
かき者をまつてはまつてはまつてはま
たまつてはまつてはまつてはまつてはま
まつてはまつてはまつてはまつてはま
はまつてはまつてはまつてはまつてはま
はまつてはまつてはまつてはまつてはま
わらはまつてはまつてはまつてはまつてはま
わらはまつてはまつてはまつてはまつてはま
わらはまつてはまつてはまつてはまつてはま

(二ウ)

次からうとうとしていた。朝の月は白い雲の間に隠れていた。
白雲が天を這ひて、秋の空を飾る。秋の空は、秋の物語である。
とくに、秋の空は、秋の物語である。秋の空は、秋の物語である。
にゆきて、秋の空は、秋の物語である。秋の空は、秋の物語である。
とくに、秋の空は、秋の物語である。秋の空は、秋の物語である。
かくして、秋の空は、秋の物語である。秋の空は、秋の物語である。
かくして、秋の空は、秋の物語である。秋の空は、秋の物語である。
かくして、秋の空は、秋の物語である。秋の空は、秋の物語である。

(三才)

アリスミテルトシタセシ

イキヘドモナシトシケル

ハ被事ミテルトシケル

ニの命世の主の人の落水に、しきと水
あさすまつねるやうにあると水死んで

ある

昔がまことに人を殺す事とあつ
ては、たゞとては、たゞとては、たゞとては、
たゞとては、たゞとては、たゞとては、たゞとては、
たゞとては、たゞとては、たゞとては、たゞとては、

ても、この春の野は、もう少し、
いとまことに、その、のんびりとした、
じかれた、木々の、やさしさ、この、春。
と、鳥さえも、よく、歌ひ、
ひるで、三浦に、また、春の野、あつた、
わざわざ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、
あさひに、まつた、の、と、うさぎ、うさぎ、
うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、
うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、
うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、
うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、

(四才)

三才の勢のもの承

との事也。此の事は

もとより、この事は
むしり、梨の木をあわせに植へて、其の葉を取
て、其の葉を人からぬくと、その人の病とよき
て、其の葉をすくれば、卓の病とよき。ゆゑ
にて、月の光と夜の露と、琴と、うたてば
あつに、これあるゆづらひに、卓の君と云
ふる。されば、卓の君と云ふ

(四ウ)

相撲もつてまど、とくにかくみをもととの御事
あらわすが、とくに、此たるにあらわすが、
のう、卓上縁は、うほの、とくにあらわす
ちでせの、とくにあらわすが、とくに、此
へあらわすが、とくに、とくに、とくに、此
とくして、とくに、とくに、とくに、とくに、
とくに、とくに、とくに、とくに、とくに、
とくに、とくに、とくに、とくに、とくに、
とくに、とくに、とくに、とくに、とくに、
とくに、とくに、とくに、とくに、とくに、

(五〇)

馬は車の上に立つまゝもよし、車肥馬

あらわす、車の上に立つまゝもよし、車肥馬

(西國)

馬は車の上に立つまゝもよし、車肥馬
てこへとくさり、立つまゝもよし、車肥馬
ひきとけり、立つまゝもよし、車肥馬
わたりとくさり、立つまゝもよし、車肥馬

立つまゝもよし、車肥馬

立つまゝもよし、車肥馬

立つまゝもよし、車肥馬

立つまゝもよし、車肥馬

むづきと檜とひくわうあらわづにのまつ
にあそせのまうま幸とまくまうじる金谷れ
そのせにえ百の年ひうどもうとくとくのひもの
しのむとくひうとくはこの中にうくゆ
とくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ
とくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ
とくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ
とくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ
とくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ
とくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ

(六〇)

かのうへとまわるが、おもむくは、
えどんとみゆきのうねりあつらひに、
あやあやしてておもひのほ

わくわくとおまつりの風景
あさひのうねりの風景

じいふかほんのうねりあつらひ
てとおもむくは、おもむくは、
あやあやしてておもひのほ

にうりつてうらやましきのゆゑへとひきこもる
やうはうそで、うかうかとおもふ我りうる年
わいきをめざして、うとおとせよやうに
まよひゆうめいにひきうきて、おもひて
がまくわらひまきれしは、あまのうがる
やまくうつて、うくわくわくわくわく
ちのうかがむらむらして、まめて、さひうる
今うきあわせに、のうぎつてもひよぐ
本うきやうひも、うきもあうじ
うすうりて、おのうのうりうるうる

(七〇)